

島田正治

映画監督の実相寺昭雄さんが亡くなった、と日本の娘から連絡があった。六十九歳、病名は胃癌だった。わたしがまだ日本にいた頃、もう三十年も前になるが、住んでいた川崎の宮崎台、東急電鉄宮崎台駅降りたすぐ前、0分のところに一軒のコーヒー店が誕生した。その名は「花林(かりん)」。このオーナーは写真家の小池汪さんで、今のように駅前ビルディングで埋められておらず、まだいっぱい空地が残っていた。

そんな折、何かの話の中で、駅降りたあたりにコーヒーでも飲んで休める場所があるといいなと言ったところ、小池さんは「いや、作りますよ」と即実践、まもなく瀟洒な喫茶店ができた。さほど広くはない。そしてその一面を利用して、ミニギャラリーも作られて作品が並べることができた。できて最初の作品展は自作の写真展が開かれ、ついで第二回展はわたしの展覧会を開くことになったのである。

題して「小さなちいさな絵の百点展」とした。これは各新聞の川崎版が大きくとりあげてくれて、ちょっとした人気となった。郊外にできた文化の花を咲かせようということでもあった。まだあちこちにギャラリーなどあまりなかった頃である。珍しかった。

展覧会の会期半ばにして一通の置手紙があった。見ると原知佐子とあり、なかなかおおらかな字で風格があった。原知佐子さんといえば女優で、以前、新宿の映画館で松本清張原作の「黒い画集」を観たことを思い出した。

ニューフェイスで登場、サラリーマンの小林桂樹と共演、なかなか迫力があつた。その原さんがまたどうしてここへと思ったりした。そのうち原さんのご主人が実相寺さんであることを後で知った。そしてまもなく実相寺さんのハガキがわが家に舞い込むようになったのである。

届くハガキはペンか筆でなかなか慣れた字であり絵であった。そのうち毎日くるようになった。

一度用事で実相寺さんの住んで居る万福寺のアパートを訪ねたことがあつた。玄関ドアの外に雑誌や古新聞など、山と積んであつて、よく見ると「朝が遅いので早くから起こさないで下さい」と張り紙がしてあつた。

実相寺さん監督で日本テレビドラマ、芸術祭参加作品「波の盆」が作られた。倉本聰脚本、武満徹音楽、笠知衆、中井貴一、加藤治子出演とそうそうたるメンバーであつた。そのドラマの題字をたのまれて書いた。これはその年のテレビドラマ部門のグランプリを受賞した。

そのうち、わたしはメキシコへ渡り住むようになったが、その頃「円空」の映画を作りたい。またその映画のタイトルも書いてもらいたい、ひいては円空のことを知ってもらいたいと、円空に関する書物を何冊も送ってくださったことがある。すでに主演俳優まで決まっているという話だが、作るまでには至らなかった。

メキシコに居ても、日本の新聞や雑誌を見ることは割に多いので、ときどき実相寺さんの書く文章には触れてはいた。東京藝術大学で教鞭をとっておられるとも聞いた。逝去六十歳代ではまだまだ若い。博学の上に教養と実践人、まさに惜しい人を亡くした、と残念でならない。

ご意見・ご感想はアルテ・シマダまでお送りください。